慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	つい昨日のこと
Sub Title	
Author	泉, 秀樹(Izumi, Hideki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.521- 523
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0521

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つい昨日のこと

泉　秀樹

私が文学部の入学試験を受けたのは昭和三十六年二月のことで、ペーパーテストに続く二次試験は、二人の試験官に面接を受けた。

試験官二人のうちの一人はまったく記憶に残っていないが、いま一人は鮮明におぼえている。忘れようったって、忘れられるわけがない。その理由はあとで述べるが、とまれ入学した私は、英文科の講師であった上村達雄先生担任のクラスに入って日吉で教養課程を過し、二年から中国文学専攻に進んだ。

三田に移って、私は驚いた。同じクラスから六名が中文に進んでいたからである。

青井忠之、斉藤春明、野沢（大川）素子、竹内清明、三室源治、そして私の六名だが、当時の文学部は英文・社会学科が花形で、中文を選ぶのはよほど変り者だといわれていたから、自分のことはタナにあげて一クラスから六名ということに異様な印象を抱いた。

さらにおどろいたのは、一年前の入学試験の面接の試験官が講義に現われたことだった。

試験官の一人は藤田祐賢先生だったのである。

試験官は夥しい数にのぼる受験生を面接するから、面接試験のお話をしても顔は思い出されないご様子だったが、私にとって藤田先生は忘れられない存在になった。きわめて確率の低い偶然であり、私は自分が中文専攻を選んだのはかねてから決められていた必然性に従ったまでであり、藤田先生に慶応義塾に入れていただいたと思うようになったのだ。　以後三年間を中文の学生として過ごしたわけだが、仔細に思い出せば出すほどハズかしさで叫び出したくなるような堕弱な学生で、朝から晩まで遊び暮らしていた記憶しかよみがえってこない。

同期生では等々力（世田谷）に住む島村国徳が年嵩（としかさ）で、数区画はなれたおなじ等々力のアパートにいた私は、毎日のように島村宅へ遊びに行き、自由ヶ丘や渋谷の酒場へ飲みに出掛けた。

飲みに行った、というと聞こえがいいかもしれないが、月々の仕送りでダラシなく遊び暮していた私は、金を使い果たすと島村のおふくろさんに食事をつくってもらい、酒場で飲む金は島村にタカっていたのである。島村には、そのころからそういう大人の風格があった。

渋谷や自由ヶ丘で酒を飲み、帰るときには漬物とか梅干とかをパックに入れてもらう。いちおう味のいいものだった（はずだ）が、酔っ払ったうえでのことだし、たいした食べ物ではない。

そうした食べ物を、島村や私は、等々力に帰る途中、奥沢駅で降りて村松暎先生のお宅に届けた。届ける、といっても深夜だから、鉄格子の門扉をそっとあけて玄関のドアの前に置いておくだけだ。

食べていただくというより、そんなブキミな食べ物を食するはずがないのだから、朝、ご家族のどなたかがドアを開いたときパックを見てびっくりするだろうという、バカげたイタズラである。

バカげているうちはよかったが、私は工事現場にならべられた黒と黄色に塗り分けられた標識の棒の芯から、明滅しているバッテリーつきの豆電球を盗んで、お宅のブロック塀に乗せておくという悪質なこともやった。

そのころちょうどところ構わず時限爆弾を仕掛ける「草加次郎事件」（迷宮入りになった）が頻発していたため、村松先生は爆弾だと思われて、おっかなびっくり長い物干竿でそれをドブのなかへ突き落したとあとになって伺い、以後イタズラはやめた。

そして、この間、村松先生がひとことも叱ろうとなさらなかったのは、私たちの行為が余りにもバカげていたからだろう。アホらしさにウンザリされた気配であった。

こうした記憶は本当につい昨日か一昨日の出来事であ

るように思われるのだが、指折り数えてみると、三十年近い歳月が流れ、そのころの両先生はまだ三十代であったことになる。ご定年をお迎えになると伺って、私はただただ時の流れの素早さを訝るばかりだ。

おくればせながら申し上げると、私は卒業後新聞社に就職し、退社したのちは文筆業で生計を立てて現在に至っているが、中文で三年間を過ごしたことを、今になってやっと有難いことだと思うようになった。

当時御存命であった奥野信太郎先生ならびに両先生から、文章を書く者の生き方、基本的な姿勢が柔軟生に富むものでなければならないとお教えていただいたことに、今更ながら気がついたのである。

両先生のご健康とご健筆を心からお祈り申し上げたい。

（文筆業・昭和四十年卒）

「村松・藤田　両先生と私」

中村文峰

昭和四十二年の初夏であった。

三田の西校舎の二階で村松先生の「中国文学史」を聞いていると、窓の外から金魚売りの声が聞えてきた。突然講議を中止した先生は窓際に立ち「今頃金魚売りの声は珍しい」と言って懐かしそうに窓外を眺められた。

三十六才の老学生の私は、先生に「中国文学史」や「論語」などを習ったが、この金魚売りの声のみが脳裏に響くだけである。

実に不勉強な学生であった。

当時、市川の知人の家に止宿し品川にも部屋を持っていた私は、大井町線を利用してよく村松先生の家に碁を打ちに行った。好い勝負であった。時に遅くなり「お壽